

幼稚園教諭養成における付属幼稚園の存在意義 ——長野県短期大学付属幼稚園の場合——

小林 洋文*

はじめに——幼稚園教諭養成のあり方をめぐる全国的現状と課題

1. 幼稚園教諭一種免許状取得者の漸増は全国的な傾向

幼稚園教諭の免許状取得者は他の学校教員免許と基本的に同じ仕組みで取得しているが、現実には二種免許取得者が多く、そのほとんどが短大、指定養成機関卒業者である。またその大部分は合わせて保育士資格も同時に取得しており、結果として、幼稚園教諭・保育士ともに「短大・専門学校等で2年間の養成」による場合が多いのが現状である。(表1, 2)

しかし、近年、大学における一種免許取得者が漸増しており(平成9年4,456人, 10年4,413人, 11年4,467人)、幼稚園就職者も増大しつつある(平成9年957人, 10年979人, 11年1,021人)。これに対し、短期大学では免許取得者も就職者も減少傾向にある(免許取得者・平成9年29,722人, 10年28,878人, 11年27,496人, 就職者・平成9年7,887人, 10年7,992人, 11年7,234人) = 表3)。

この背景には学生の4年制大学志向の一般化とともに、採用側にも高学歴者、より資質の高い教員を求める傾向がある。

2. 幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方の取得は社会的要請

現状では幼稚園教諭と保育士は教員免許と保育士資格の2種に分かれ、制度上その取得は完全に切り離されている。しかし昨今の子育て支援、保育需要の増大に伴って採用側の採用条件として2種類の免許・資格の同時保持が明確に求められるようになってきている。そのため国でも「幼稚園教員免許と保育士資格の併有机会を更に充実するため、双方が取得できるよう養成課程の充実や、科目等履修生制度等現職者に配慮した仕組みを活用する」(「幼児教育の充実に向けて～幼児教育振興プログラム(仮称)の策定に向けて～」平成13.2.2文科省報告)等の取り組みを始めた。具体的には、幼稚園教諭と保育士の養成カリキュラムにおける共通科目を増やし、認定単位も重複させるなどの方法が検討されている。

その結果、保育士資格取得者は表4のとおりである。大学での取得が増大傾向にあることがわかる。その背景には近年保育士養成を行う大学が急速に増加していることが上げられる(平成9年度28校, 10年度30校, 11年度40校)。

また、教育実習については、「教育職員免許法施行規則」によれば、幼稚園の教育実習は専修、一種、二種ともに5単位の実習(「事前・事後指導」1単位を含む=第6条第1項付表の備考9)が義務付けられている(第6条第1項付表)。

1単位分の実習期間は30時間から45時間の授業時間の範囲で大学等が定めることになっている(大学設置基準第21条第2項2, 短期大学設置基

*〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学
*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Minwa,
Nagano 380-8525, Japan.

表1 免許状の種類別の認定課程を有する大学等数（平成10年5月1日現在）

区分	大学等数	認定課程を有する大学等数	免許状の種類別の認定課程を有する大学等数								
			小学校	中学校	高等学校	盲学校	聾学校	養護学校	幼稚園	養護教諭	
大学	国立	99	79(79.8%)	51	73	79	4	10	51	50	13
	公立	61	36(59.0%)	3	31	34			1	2	4
	私立	444	346(77.9%)	40	321	344			27	44	9
	計	604	461(76.3%)	94	425	457	4	10	79	96	26
短期大学	国立	25	(0.0%)								
	公立	60	24(40.0%)		21					12	2
	私立	502	374(74.5%)	46	325				1	206	26
	計	587	398(67.8%)	46	346	0	0	0	1	218	28
合計		1,191	859(72.1%)	140	771	457	4	10	80	314	54
大学院	国立	99	82(82.8%)	51	73	82	5	10	49	50	12
	公立	41	25(61.0%)		22	25					2
	私立	299	214(71.6%)	21	181	212			3	20	4
	計	439	321(73.1%)	72	276	319	5	10	52	70	18
専攻科	国立	35	32(91.4%)		3	6		3	28		
	公立	1	1(100.0%)	1	1	1					
	私立	47	36(76.6%)	7	28	35				6	1
	計	83	69(83.1%)	8	32	42	0	3	28	6	1
養成機関	国立	7	7(100.0%)				1				6
	公立	21	21(100.0%)							1	20
	私立	38	38(100.0%)	2	1					38	1
	計	66	66(100.0%)	2	1	0	1	0	0	39	27

(注) 養成機関とは、指定教員養成機関の略で、免許法第5条及び同条別表第1備考第3号に基づき、文部大臣が教員需給の状況等も勘案しながら、教員養成機関として適当と認め、指定した機関である。

準第7条第2項2)。

多くの養成校において、実習の場合、一日8時間（休憩を含む）実習で、1週間を1単位とする授業計画を作成しているのが実情であり、本学もその方法を採用している。

なお、幼児教育学科は、創設時より一貫して幼稚園教諭養成を目的とする教育課程編成で、保育士資格は資格試験によってしか取得できないが、

例年ほとんどの学生が幼稚園教諭二種免許状を取得し、過半数以上の学生が幼稚園に就職している。長野県は幼稚園の絶対数が少ないため、学生の希望にかかわらず就職にはかなりの困難がつきまとうが、幼稚園就職率は県内の他の短大にくらべてもその比率が抜きん出ている。例えば、平成11年度の各短大等幼児教育学科卒業生のうちに占める幼稚園就職者数の割合を見ても、本学65%、上田

表2 幼稚園免許取得状況
平成11年6月1日現在

			専修	一種	二種	計
大 学	国立	教員養成 大学学部		1,436	1,221	2,657
		一 般		17	1	18
	公 立			25	12	37
	私 立			2,989	63	3,052
	計			4,467	1,297	5,764
	短期大学	国 立				
公 立				535	535	
私 立				26,961	26,961	
計				27,496	27,496	
大学院・ 専攻科	国立	教員養成 大学学部	56			0 56
		一 般	12			12
	公 立					0 0
	私 立		[10] 35			[10] 35
	計		[10] 103			[10] 103
指定教員養成機関					3,979	3,979
合 計			103	4,467	32,772	37,342

表3 幼稚園免許取得者の幼稚園就職状況
平成11年6月1日現在

大 学	国立	教員養成 大学学部	298
		一 般	7
	公 立		6
	私 立		710
	計		1,021
短期大学	国 立		
	公 立		133
	私 立		7,101
	計		7,234
大学院・ 専攻科	国立	教員養成 大学学部	14
		一 般	1
	公 立		
	私 立		6
	計		21
指定教員養成機関			1,357
合 計			9,633

表4 保育士養成施設別の資格取得者教（注，保育士試験合格者を除く）

年度	区分	大学	短期大学	専修学校	その他	合 計
平成10		919人 (2.7%)	26,804人 (80.6%)	4,466人 (13.4%)	1,086人 (3.4%)	33,275人 (100.0%)
11		1,116 (3.4)	26,324 (81.1)	4,286 (13.2)	725 (2.2)	32,451 (100.0)

女子短大11%，清泉女学院短大37%，松本短大9%，文化女子大長野専門学校24%（飯田女子短大は不明）と，そのことが明瞭に裏付けられている。本学幼児教育学科の学生の実力が広く県内幼稚園

理事者の信頼を得ているなによりの証左であろう。（なお、「保育者の資質」については，人間と子どもについてのよほど深い洞察が必要であると考えますが，今ここでは問わない。）

3. 長野県短期大学付属幼稚園の場合

昭和36(1961)年、長野県幼稚園連盟より県に「県内には幼稚園教諭養成機関がないため、県短で幼稚園教諭養成を行ってほしい」との請願が出されたことがきっかけとなって、本学に児童科の設置が申請され、昭和37年1月文部省の認可があり、同年4月より養成が開始された。当初の学生定員は35名だったが、昭和41年度より40名に増員された。昭和43年4月より「児童科」が「幼児教育学科」と改称され、今日に至っている。

学級編成は、3歳児は2学級定員各15名、4歳児1学級30名、5歳児1学級30名。教職員は、園長(本学幼児教育学科の教員が併任)、主任教諭1名、学級担任教諭4名、補助教諭(ヘルパー)3名、事務職員1名で、養護教諭は欠員のままである。

I. 長野県短期大学付属幼稚園の存在意義と役割

はじめに

付属幼稚園の掛け替えのない存在意義及び役割は、一般的に、以下の三点を指摘することができる。

第一に、毎日の保育を通して幼児の心身の健全な成長・発達を援助しながら、《自立した子ども》《意欲的な子》《思いやりのある子》を育成する保育実践の機関であること。

第二に、短大幼児教育学科の教育実習生を受け入れ、未来の保育者に必要不可欠な実践的指導を行う実習指導機関であること。

第三に、保育者(教職員)自身が日々の保育実践を通して、幼児教育についての理論と実践について臨床的、創造的、実験的研究を深くすすめる保育研究の機関であること。

1. 自由活動、遊び重視の保育実践機関

(1) 保育方針・内容

付属幼稚園の存在意義という視点から、まず付

属幼稚園の保育実践とその特色について、考察してみたい。

同園が保育実践で大切にしていることは、第一に、ひとりひとりの子どもを真に大切にすること、第二に、遊びこそが幼児期の学習そのものであり成長の力になると考えて、自由に遊べる時間を十分設けていることである。その理由を『入園案内』では次のように述べている。

《子どもたちは、それぞれに個性があったり、同じ年齢でも発達の早い子もいれば、ゆっくりな子もいます。ですから、保育の中でも、できあがりの完成度や統一性を求めるのではなく、そこに至るまでの、その子なりの活動のプロセスを大切にしています。これが、個人個人の充実につながると考えています。

幼児の生活の中心になるのは「あそび」です。子どもたちにとっての「あそび」は、余暇を楽しむ大人の遊びとは違います。あそびの中で、自ら考え、工夫し、試行錯誤を繰り返しながら、さまざまな経験を積んでいきます。このようなあそびの中で経験したことこそが成長の力となり、個人個人の充実につながると思います。

そこで本園では、子どもたちが自分たちで考え、創り出していくあそびが十分に行えるようなより良い環境を作るために、次のようなことに心掛けています。

〈一日の時間配分の工夫〉子どもたちが朝みんなと一緒にあそびが始められるように、登園時間をほぼ一斉にしています。登園後は、自由時間を約2時間とたっぷりとり(自由活動)、子どもたちが自分でやりたいことを見つけてあそびを楽しみ、自己を充実させられるようにしています。また、子どもたちが、基本的な力を身につけたり、みんなと一緒に活動することを楽しむ時間として、一斉活動を行っています。

〈仲間と共に〉兄弟数が減少し、地域での子ども集団がなくなりつつある現代では、幼稚園が子

ども集団を経験できる貴重な場となっています。そこで本園では、その年齢に合った活動を十分に行えるように、同年齢集団のクラスを中心にして保育する一方で、異年齢集団の中での子どもの育ちを重視して、現代社会では失われてしまった異年齢集団作りも積極的に保育に取り入れ、成果を

挙げています》。

(2) 付属幼稚園の一日の時間割編成

そのような願いは、下記の「幼稚園の一日」の時間割編成に実に端的に具体化されている。

9:00 (9:10)	9:20	10:30頃	12:00	15:00
登園	自由活動	一斉活動	お弁当	自由活動
4~5歳児	3歳児			お昼寝
				降園の活動
				降園

以下、通園方法、自由活動、一斉活動、お弁当について、それぞれの特徴をみておこう。

①登園時間は、駐車場の混雑を避けるため、4、5歳児は9時から9時10分、3歳児は9時10分から9時20分と多少の時間差を設けてはいるが、基本的には、遊びを重視する観点から、子どもが一斉に遊びを始められるように登園時間を配慮して設定している。

通園バスはなく、原則として保護者同伴の徒歩通園としている。結果的には、それによって、親子の触れ合いや交通ルールを覚える機会になっており、登園・降園時に保護者と教師が子どもの様子を直接伝え合うコミュニケーションのよい機会にもなっている。また、歩く機会がめっきり減少している現在、親子で手をつないで歩くことによって、丈夫な身体づくりともなっている。親の側からは面倒なことかもしれないが、意外と見落とされがちな徒歩通園によるメリットである。

②幼稚園の一日の生活時間の中で、子どもたちが自由に思う存分遊べるように「自由活動」の時間を長めにとっている。それは、子どもの遊びを大切に、遊びを通して子どもを育てたいと願っているからである。子どもたちにとって「自由活動」は、やりたいことを自分で見つけて遊びを心から楽しみ、自己を充実させるとも大切な時間である。もちろん教師も子どもと一緒に遊びながら、ひとりひとりに合った保育に日々心掛けてい

る。

③表現活動や行事、また季節の遊びなど子どもの発達に必要不可欠だと思われる課題は「一斉活動」として、クラス毎、学年毎、園全体で行っている。基本的には、課題を全員が経験できるように指導、援助しているが、あくまでも子どもたちが活動の主体になって楽しく充実した時間になるように配慮している。

④給食はやっていない。お昼は「お母さんの手作りのお弁当」をいただくようにしている。給食には確かに良い面もあるが、幼児期の食事の習慣は、他の様々の生活習慣と同様個人差が大変大きいので、ひとりひとりに合ったお弁当の方がよりよいと考えている。また、母親の手作りの物が少なくなったと指摘される今日だからこそ、なおさらおかあさんの手作りのお弁当の良さが伝わるようにしたいものである。ただし、お弁当にすると、ともすると毎日好きな物だけを詰めてしまいがちになるので、栄養のバランスには十分気をつけていただくように保護者側をお願いしている。

⑤なお、降園時間は、保護者や入園希望者等の要望を受け止めて、2002年度から、午後2時から3時に変更した。

(3) 付属幼稚園に対する保護者の評価

—アンケート調査の結果より—

2001(平成13)年10月初旬、園長(小林洋文)

名で「付属幼稚園の保育に関するアンケート調査」を実施した結果、80余名（定員90名）中、53名（回収率、約62%）から実に多様な意見が寄せられた。このような意見集約の試みは本園創立以来初めてのことであったが、調査結果は、本園の保育方針等に対する保護者の理解と共感が予想以上をはるかに超えて多いことを明瞭に示している。

*

質問1 付属幼稚園に入園した動機

①保育料が安い

○保育料が格安。主人が安いと言う。商売でないので信頼。普通のサラリーマン家庭には手頃。(24名)

②保育方針、保育内容に共感

○のびのび教育。夢中で遊んでいる園児たちを見て。子どもたちのパワーと眼の輝き、自由さ、のんびりしていて懐かしい雰囲気。素朴な保育。(18名)

○遊び中心の保育、自由に遊びながらいろいろ遊ぶ。自由活動の時間が多い、泥んこ遊び、砂遊びなど汚れる遊びをたくさんやらせてくれる。外遊び、思いっきり体を動かして遊ばせてくれる。思い思いに自由に遊んでいる。(13名)

○入園前見学に来て、保育目標や内容、方針を熱心に説明してくれた。わが家の願いと一致。対応がよかった。雰囲気が他の園と明らかに違って良かった。10園回り公開保育にも参加したが、違いにびっくりした。遊び中心で、安心した。(5名)

○保育方針がはっきりしている、しっかりしていて、良い。(3名)

○あんなにのびのびと子どもらしい絵を描く園児募集ポスターを見て入園を決定。(1名)

○何事も無理にやらせない、子ども自身楽しんでやっている。運動会を見学したとき、のびのび無理なく楽しそうにやっていた。子ども中心に考えてくれる。個性尊重、自主性が芽生える保育方針。(5名)

○自由活動と一斉活動のバランスがとれている。(1名)

○早期教育をしていない。園内で「お稽古事」がない。(2名)

③知人に良いとすすめられて

○とにかく遊べるよ、良い園だよという友人の勧めで。卒園時の親から「本当にいいよ」と何度も聞かされていた。(6名)

○在園児のお母さんの話から。(1名)

○子どもが「この園に通いたい」と言ったことが一番の動機。(1名)

○行事に追われないのびのびとした保育。(2名)

④先生が良い

○先生がベテラン揃いで経験豊か、熱心と聞いて。研究熱心、県短付属なので力量もあるだろうと判断した。(6名)

○県短付属だから（保育内容、子育てについての学習もあるだろうと思い）。(1名)

○少人数で先生の目が行き届き、よく面倒みてくれる。園の規模、全園児の名前を先生方が知っている。雰囲気が家庭的、自由で温かい。(14名)

○教師の質が良いと家族に勧められた。(1名)

○先生が子どもにこびていない。(1名)

⑤環境が良い。

○適当な通園距離。自宅から近い、歩いて通える、徒歩数分、車で送迎できる距離。(10名)

○園庭が広い、園庭以外の大学のグラウンドなどでの屋外活動の充実。(7名)

○町中なのに木や草がたくさんあり自然に囲まれた静かな環境。自然を活用した保育。(4名)

⑥保育時間が適当

○子どもが負担にならない程度に保育時間が短い。保育園か幼稚園か迷ったが、子どもと一緒に過ごせる時間を長くしてあげたかったから。この時期、5時間が限度。降園時間が早く、親子の時間が十分取れる。お弁当持参、2時降園、長期休み等手はかかるが、子どもと一緒に子育てを楽しみたい。

(4名)

○保育を考えると、保育園より幼稚園がいいと思
って。(1名)

⑦制服、通園バス、お弁当、その他について

○制服がなく自由な感じ。(2名)

○制服はあった方がいい。制服がなくてこの3年
間、朝子どもと何回ケンカをしたことか。(1名)

○年齢別保育をしているのが良い。(1名)

○バス通園、給食、制服がない。親の送り迎えで
あること、どれもよい。(2名)

○通園バスは味気無い。バス通園だと先生と直接
会えない、親の手から先生の手へ。(2名)

○アレルギーがあるので、お弁当持参は安心。
(1名)

○園舎を見てホッとした(学校みたいでない=圧
迫感がない)。(1名)

○近くの園に疑問を感じて。(1名)

○近所のお友達が通っていたのでお友達がいたほ
うが良い。(1名)

○兄弟姉妹が重なっている。(1名)

○姉も卒園。(1名)

質問2 付属幼稚園の保育等に対する感想・要望

①保育方針、保育内容について

○保育内容に満足。一人一人に合った保育。誠実
で丁寧な対応に感謝。すぐく子どものことを見て
くれていることが分かる。遊び中心に満足。のび
のび、安心して預けられる。わたしの気づいてい
なかったことを気づかせていただける(学習的・
お稽古事的要素は望まない)。この園に入れてよ
かったの一言、とても満足。あたたかい。遊び中
心。(24名)

○一番驚いたのは一斉活動が始まるまでは何をし
ても自由。前の幼稚園と違って初めは戸惑っ
たが、今ではその時間が一番好きらしい。(1名)

○自発的に遊べる子どもばかりではないから、自
由活動の意外な難しさを感じた。この活動は、

「意欲」や「自立」を育むことにつながっている
のでしょうか?(1名)

○運動会やお店やさんごっこ、その日が来て終わ
りではなくて、終わっても続いているのに感心。
結果より過程を大事に考えてくれている。(2名)

○行事の意義を知らされて驚いた(お店やさんご
っこは3年間の集大成という位置付け)。(1名)

○見せる保育、親の受けをねらうより、同じこと
を繰り返すことの必要性が大切。外見より内見で
す。(2名)

○上の子がお世話になった他の幼稚園では、とに
かくもっと遊び込む保育だった気がする。家庭で
不用になった遊びに使えそうな物をクラスに持つ
て行って数日かけて大作に取り組んだ。もっとも
っと自由保育を。(1名)

○登園後の外遊びが少ない。もっとダイナミック
な遊びを。(1名)

○毎年、同じ内容、同じ場所(遠足など)と思
いましたが、その意味や大切さを知ることができた。
(2名)

○自発性尊重は分かるが、もっと先生側からの触
発があってもいい。(1名)

○何事も手作りなのがよい。(1名)

○少しずつ積み上げていく、少しずつ、少しずつ
……見守ってくれる保育に満足。(1名)

○運動会の日程を9月くらいに早めてもらいたい。
(1名)

②先生が良い

○先生が熱心で、園児との信頼の絆が深い。経験
豊かで、信頼できる。考え方がしっかりしている。
ベテラン揃いの先生に安心。研究熱心。異動がな
いので年少から年長まで通して見てもらえる。感
謝。頼りになる先生がいることはどんな立派な施
設にも勝る。(14名)

○先生同士の雰囲気がとても良く裏表もなく、園
がとてもオープンな感じですばらしいと思います。
先生同士、親同士、子ども同士の関わりが深い。

(2名)

○連絡帳での的確なあたたかいアドバイス、有り難い。(1名)

○時々ドキッとするような先生の言葉、でも担任の先生によって変わった子どもの姿を見ていると安心して預けられる。(1名)

○施設の老朽化、30人を1人で見切れるか、他の園に比べて多い休日、半日保育等々、……不満も多少あるが、この園でよかった。研究会でお休み、半日が多いが全体としてとても信頼している。

(2名)

○子ども同士のトラブル(ケガ、物を壊された等)があった時、親への説明がない。(1名)

○お誕生日カード、あらかじめ親もメッセージを書ける欄があれば。(1名)

○親の悩み相談に親身になって乗っていただける(親育て)。(1名)

○年中、年長の先生を増やして。先生方がとても大変そうです。年中、年長も4、5月はヘルパーでサポートの体制をとって。年度当初は2人体制なり主任の先生に入っていただくの工夫を。年中、年長も15人ずつの2クラス制にして。(5名)

○熱心で感心するが、県立のせいとお役所的。もっと気さくにサービス精神を。(1名)

○行事や参観日等、内容が毎年全く同じものが多いので、二人目になったら親の方に新鮮味がなくなった。ベテラン揃いで結構だが、内容にマンネリ化の面も(参観日の子どもの制作活動など)。

(2名)

○先生方に任期制を。(1名)

③登園・降園について

○10分の登園時間は短すぎる。8時50分ころ行って注意された、厳しすぎないか。(2名)

○登園時間を守ることをもっと徹底しよう。1日のスタートは大切です。(1名)

○登園、降園時に下駄箱で迎えるのは担任の先生

にしていただきたい。知らない実習生が立っていて迎えてくれると、うちの子は入って行きづらいそうです。(1名)

○3歳児の夏休み前の水曜日の半日保育、少なくとも。(1名)(注・2000年度から水曜日も全日保育に変更した。)

④降園時間、延長保育について

○降園時間が早すぎる。有料での延長保育を。働いているお母さんにはこの時間では無理。これができる家庭は少なくなってきている。あと30分延長してください。年少は体力がないのでちょうどいいかもしれないが、年長さんは物足りない。サマータイムの導入はどうか。せめて2:30に。親も大変、子も大変。登園が30分遅くなったので30分降園遅らせたなら有り難い。預かり保育がないのは本当に残念、せめて3時まで延長を。保育時間が短いので、3人目については入園を検討中。(21名)

(注:前記のとおり、2002年度から保育時間を1時間延長して午後3時降園とした。)

○保育時間、もうすこし長くとも思うが、子どもにとってはいいのかも。(1名)

○降園後の遊び時間は何時までと決めて。(1名)

⑤安全管理

○大阪池田小事件の影響で屋外保育減り残念。(1名)

○広いグラウンド、自然環境、恵まれている。大学の森、最高。(3名)

○防犯面考えると、常勤の男性職員を。(1名)

○緊急連絡網、もっと正確になるように。(1名)

⑥通園バス、お弁当について

○園バスを。(1名)

○園バスなくて大変だが、毎日担任の先生と顔を合わせることができて安心。お母さん同士も話ができる。この時期だけだと思うと園と親との関係深くなり嬉しい。(4名)

○週1(又は2、3回)の給食を。子どももたま

には違ったものを食べたい。おかずが朝食と一緒だったりで片寄ってしまう。(6名)

○お弁当も、将来の良い思い出になると思う。(1名)

○保育時間、給食がない、園バスない。それぞれ良いこともたくさんあるが、時代のニーズに合わなくなってきているのかなとも思う。(1名)

○「無い無い園」、苦にならない。(2名)

⑦幼稚園運営、保護者との連携について

○子どものことより親の都合に合わせる経営をする幼稚園が増えているが、この園は「子ども本位」でとても良いと思う。(1名)

○保育を語る会や園長先生を囲む座談会など、立ち止まって考え、人の考えや悩みを聞けたり勇気づけられたりする機会があって、有り難い。(1名)

○保育を語る会などあっても、その声を聞いて改善されることがほとんど無く、無意味。(1名)

○幼稚園に行く機会が多く最初は戸惑ったが、子どもの成長の様子が見れて、今では有り難いと思う。(1名)

○行事等で、準備から片付けまで親の出番が多すぎる。(1名)

○母親の負担重い、専業主婦でないといけない。(1名)

○見学時に、もっと開放的に対応して、11時頃行ったら保育の妨げになると帰された。(1名)

○園長先生はもっと子どもと触れ合い共に遊んで(お忙しいでしょうが)。園長先生の話好き。(2名)

○降園後も親同士いっぱいおしゃべりタイムがあって楽しめる。(1名)

○先生方が熱心だが、親の意見が反映されにくい。／先生と親とのコミュニケーションを大切に。／駐車場の状況把握を。ウサギ飼育は大変そう、見直しては。／懇談会の日程の再検討を／登園時間の変更の説明をして。保護者の声も聞いて。

(1名)

○個人懇談が増えた経過の説明を。私はむしろ参観日の増加を望む。(1名)

○個別懇談会、年3回は多すぎる。(1名)

⑧施設・設備について

○園舎の老朽化、新築を(台風による臨時休園はそのせい?)。(5名)

○建て替えが無理なら、せめてサッシの戸にして。(1名)

○園舎、掃除が行き届いていてきれい。私は気に入っている。古いが落ち着きがある。古いものを大切にする心、子どもたちにも伝えたい。全く気にならない。(4名)

○トイレを洋式に。(1名)

○プールが狭い、改築を。設備が物足りない。城山公園プール行きを喜んでいる。(3名)

○せめてテラスの部分に戸を付けて。冬の寒さが気になります。(1名)

○冬の下駄箱に雪が吹き込む。厚いナイロンカーテンなどで覆いを。(1名)

○図書室、保育室に網戸を付けて。図書室の戸をサッシに。(2名)

○年中、年長の教室、狭い。(1名)

○通園時間帯だけ一般車両の通行止めを。(1名)

⑨その他

○園側で撮ったビデオ、希望者にはダビングして。(1名)

○学生の撮影したビデオ(卒業研究等)の上映の機会を設けて。(1名)

*

「付属幼稚園の保育に関するアンケート調査」結果の簡単なまとめと今後の抱負

1. 全体をとおして、本園の保育目標、方針、内容、教師の姿勢に対しては、いくつかのご忠告をいただきながらも、基本的には、皆様から大変深いご理解と共感をいただいているのではないかと受け取らせていただきました。毎日頑張

って保育している教職員にとっては、とても励みになると思います。

2. したがいまして、これまで本園が大切にしていた保育方針を、これからも本園の保育の大事な基本方針として、ますます大切に守っていきたいと、改めて思っています。
3. 皆様からいただいた個々のご意見に対しては、「子どもの権利条約」でもうたわれている《子どもにとっての最善の利益》、すなわち、「子どもにとってどうなのか？」という子どもの視点から見て、改めるべき点は大胆な見直しの努力を今後すすめていかなければいけないと考えています。
4. ただし、皆様からの要望事項の中には、予算等、現実の諸条件の制約下では、すぐには実現が難しい事柄もありますし、また、大人にとっては都合が良くても子ども本位に考えた場合にはどうか？と思われる事柄もあるかもしれません。お互いの信頼関係を大切にしながら、拙速を戒め、知恵を出し合い、今後の本園の在り方について焦らず真剣に検討を重ねながら、少しずつでも良い方向に向かうことができたとしても良いと思います。教職員も、ご要望にできるだけお応えできる努力をこれまで以上にしていける所存です。
5. 最後に、できれば近いうちに、園長、主任、4人の担任の先生全員が揃って、皆様と直に話し合いができる場を、例えば土曜日の午後にもぜひとも実現したいと教職員全員が願っています。そのことも皆様にお伝えしておきます。その節は、このアンケートでは文字にできなかった思いの丈をどうぞ直接お話しください。(注：その後、2002年1月19日、遊戯室で「みんなで保育を語る会」実施。付属幼稚園史上初めての試みであったが、好評であった。)

(付記)

以上のアンケート調査結果(質問1・質問2及

び調査結果のまとめと今後の抱負)は、翌11月13日、保護者全員に印刷・配布した。

II. 教育実習生の受け入れ機関としての付属幼稚園の存在意義

1. 長野県短期大学の場合

(1) 教育実習方法の変遷過程

長野県短期大学幼児教育学科では現在、教育職員免状施行規則に基づく4単位の実習(「事前・事後指導」1単位を除く)を付属幼稚園2単位、外部実習2単位に分割して実施している。分割の理由は、定員90名の付属幼稚園1園だけでは40名を超える実習生の指導は十分にできないためである。「事前・事後指導」は1年前期に週1コマ(90分)の講義と2年前期の外部実習終了後に行う実習報告会の開催、2年後期に行う教員と学生一人一人の実習評価カンファレンスを実施することで対応している。

なお、本学において、現在のような実習方式に定着するまでの変遷過程は、概略次のとおりである。

イ) 付属幼稚園がなかった時代の実習方法(昭和37~39年度)

教育実習は、昭和37、38、39年度の3年間は付属幼稚園が設置されていなかったため、文部省課程認定申請書では教育実習園として長野市の私立長野あけぼの幼稚園(園長は児童科設置に奔走した一人の荒井太一)が記載されていたが、実際には長野市内の6つの幼稚園(長野あけぼの、長野西高、旭、長野中央、若草、パドマ幼稚園)に依頼して計4週間行われた。実習の「事前指導」は、長野西高幼稚園の主任教諭に依頼していた。

ロ) 付属幼稚園の設置(昭和40年度~)以降の実習方法

付属幼稚園は昭和39(1964)年9月8日第1期工事着工。翌40年1月31日第1期工事完成後

に園児の募集を開始して、同年4月28日に開園式・竣工式を挙げる。4歳児2クラス、男女各30名で保育を開始した。

昭和41年、新たに4歳児2クラス、男女各30名が入園して、ここに年少組（4歳児2クラス計60名）・年長組（5歳児2クラス計60名）、合計4クラス計120名の2年保育の付属幼稚園の教育体制が整った。昭和49年6月30日にはプールも完成した。

これによって、学生たちは1年を通して学内で子どもを観察し、教育実習ができる態勢ができるようになり、それまで外部の幼稚園に依頼していた教育実習の「事前・事後指導」も付属幼稚園で一貫して行えるようになった。

ハ) 平成7年度から3年保育を開始

平成7年から3歳児クラス（15名）を新設して、3年保育を開始した（3歳児15名、4歳児30名、5歳児60名）。翌年、3歳児をもう1クラス（15名）増設して、3歳児30名、4歳児30名、5歳児30名の現在の保育体制が整った。

3歳児保育の開始により、3歳から5歳までの幼児の成長・発達を通して観察、研究することが可能になり、教育実習の場として、また幼児教育の観察・実習の場として、これまで以上に重要な付属機関になったのである。

ニ) 昭和44年度から今日までの実習方式

昭和40～43年度までの当初の4年間は、「幼稚園の規模が小さいので」（『長野県短期大学五十年史』）、付属幼稚園での教育実習は2週間とし、あとの2週間は引き続き長野市内の幼稚園に引き受けてもらうことにした。

昭和44年度から初めて、学生の出身地の幼稚園に2週間の教育実習を依頼するようになり、以来付属幼稚園で2週間、出身地の幼稚園で2週間という現在の実習方式になった。

実習方法をこのように変更した理由は、前述したとおり、単に「幼稚園の規模が小さいの

で」というだけに止まらず、むしろ同一幼稚園で4週間するよりも、教育方法や環境などが違った他の幼稚園を実地に体験することの方が望ましいからである。

昭和60年ころまでの教育実習のやり方は、1年次は、44名の学生を2班に分けて、半数が前期末（夏休みの後半）に1週間、残りの半数が後期末（2月下旬）に1週間、それぞれ付属幼稚園で、主として観察実習を行っていた。しかし、この方法では、同時に20名余の学生が入ることになるため1クラスに5～6名平均で、思うような指導ができない弱点を抱えていた。（実習以外に、昭和52年からは「幼児の観察」という科目を時間割の中に新設して、ほぼ定期的に付属幼稚園へ観察に出掛けた）。2年次になると、6月頃に出身地の幼稚園で2週間の外部実習をし、就職もほぼ内定する11～12月頃、2班に分かれて「仕上げ」の教育実習をそれぞれ1週間行った。

しかしその後、早い段階で教育実習をさせて、その経験（失敗、勉強不足を痛感）を生かすかたちで勉強の方がより学習効果があがると考えて、1年次に2週間、基本を大事にした実習を体験し、2年次における外部の幼稚園でその経験をより広げ深化させるという現在の方式に変えた。

(2) 付属幼稚園における教育実習

付属幼稚園実習は1年次の8月から翌年の2月にかけて6班に分け、付属幼稚園各クラスに1～2名を配属し、班ごとに2週間の集中実習を行っている

付属幼稚園実習においては、主として「直接園児や保育者に接することで幼児教育を実際に体験的に理解する」、「教育実習に対する基本的実践的な理解や態度、技能を養い、基本的な実習の流れをつかむ」等に実習のねらいを置き、挨拶や観察

の仕方、幼児への簡単で短い実際指導、実習日誌や指導案の書き方など、初歩的・基本的な事柄の理解の修得に重点を置いている。

実際の指導は、基本的には付属幼稚園の教員が担当しているが、上述のように「事前・事後指導」は実習担当教員が付属幼稚園教員の作成した指導案を事前に学生に配布するなど、幼稚園教員と連携して行っている。実習中は毎日、放課後、クラス毎に1時間前後反省会を開いて、幼稚園教員が学生の個別指導を行っている。実習終了後、一人一人の学生について、詳細な実習評価表が作成され、学生一人一人と面談のあと、幼児教育学科に提出される。学科では実習担当教員が外部実習の評価と統合し、実習日誌、教員の外部実習巡視報告書等を参考にしつつ、総合的な視点から最終評価を決定している。

また、実習終了後1、2年生合同で教育実習報告会を開き、経験を公開し、反省や交流の機会にしている。

このほかに、少なからぬ学生が自主的に希望して、1年次春休み中、2年次後半等の空き時間に“自主実習”を随時行っている。

さらに、直接的な実習のほかに、例年、学生たちが必修の卒業研究のなかで付属幼稚園のビデオ撮影や保護者へのアンケート調査、付属幼稚園教諭へのインタビュー調査、研究のための実習などを頻繁に行っており、付属幼稚園は、このような学生の研究活動にとってなくてはならないものになっている。

授業においても、付属幼稚園教育実習の活用がさかんに試みられている。たとえば、「教育実習の指導法」等の科目においては、実習を終えた学生に体験レポートを課題として課し、それを資料として、指導上の課題や方法を検討したり、討議したりする演習を行っている。また、「保育内容の研究」等の授業科目では、学生と教員が付属幼稚園に出向き、園児を対象に指導の実際を実地指

導する授業もある。このような活動は、全員が同じ園で実習することによって初めて反省や考察を共有することが可能となり、教育・研究の指導をより効果的にしている。まさに本学での授業と付属幼稚園での実践が相互に結びつき、学生の総合的な理解に寄与しているといえよう。

(3) 外部の幼稚園における教育実習

外部実習は2年次6月に2週間、原則として出身地の幼稚園において実習する。その期間は専門科目の授業は休講となり、他の授業は公欠扱いとなる。事前打ち合わせ、事後のお礼はすべての学生が自己責任（受益者負担）で行うことで実習に対する自覚と責任意識を育て、より自発的な実習態度の育成を目指している。

実習内容に関しては、園により教育方針や内容がまちまちであり、実習に対する考え方や指導能力も一定していないので、実際には実習園にお任せしている状態であり、学生に対しても実習中は第一義的に実習園の指導に従うことを強調している。

長野県内の幼稚園実習はだいたい同時期に行われるため、幼稚園ではどこも一度に数名の実習生を抱えることが多く、ときには同一クラスに同時に複数の実習生が入ることも珍しくない。複数学生の実習指導はベテラン保育者でも負担が大きく、負担過重を避けるために経験年数の少ない若い教諭も実習指導をせざるを得ない園が多い。このような場合、きわめて問題が多い実習になる例もないわけではない。

また、長野県は幼稚園の絶対数が全国的にみてもきわめて少なく、幼稚園が1園もない町村が多いので、外部実習希望者はあらゆる手段で実習園確保に必死にならざるを得ない。特に本学では、学生の交通安全と実習園での駐車場確保が困難なため、通常自動車による実習先への通勤は認めていない。そのため学生によっては通勤手段に苦慮

する例が絶えない。そのような事情から、できるだけ通勤しやすい実習園を確保することは恒常的な課題である。

2. 長野県以外の他県の公立短期大学の場合に一主として教育実習の方法を中心に

(1) 付属幼稚園のある公立短大では、どのような方法で教育実習を指導しているか。

イ) 県立新潟女子短大

幼児教育学科(幼稚園教諭養成課程)

- ・昭和41年、幼稚園教諭養成課程として発足。5年後の昭和46年に付属幼稚園設置。
- ・保育士養成課程は生活福祉科に開設しているため付属保育園はない。
- ・付属幼稚園の教員は、県内の保育研究の中心的存在として活躍している。学生にとっては、実習以外に日常的に付属幼稚園の子どもたちと触れ合う機会が多く取れるので、子どもにとけ込み子どもと遊ぶ力をつけることができる。

・教育実習は、先ず1年次に1週間、付属幼稚園で「観察実習」、次に2年次に2週間、学外の幼稚園で「本実習」、最後にもう一度付属幼稚園で1週間「仕上げの実習」の3本立てで実習。

生活福祉科(保育士養成課程)

- ・保育士資格を専門学校等で取得するよりも短大で取得する志向が強まり、県立保育専門学校志願者が減少して廃校になった際に、生活福祉科に、社会福祉士と保育士の2つの資格がとれる課程を幼児教育学科とは別に設けた。付属保育園は置いていない。

ロ) 福山市立女子短大

- ・昭和35年私学として設立、昭和38年より幼稚園教諭・保育士養成課程を設置。その際、付属幼稚園は設置したが、付属保育園は置かなかった。その後、昭和49年公立に移管した。
- ・付属幼稚園は市内の幼稚園の中で3年保育に

取り組む数少ない園の一つで、人気があって3歳児は10倍の競争率である。市内の保護者から寄せられる期待も大きい。市内公立幼稚園の中心的存在である。

- ・廃園問題は出ていないが、園舎を建て替えて、他の市立幼稚園を吸収合併する計画でいる。
- ・保育、研究ともに短大と連携してやっている。付属幼稚園の存在意義は、理論と実践の統一がしやすい。学生に対するこまやかな指導ができる。実習以外にも子どもと触れ合ったり学習研究ができる等々である。

(2) 付属幼稚園のない公立短大は、どのような方法で実習指導をしているか

イ) 山梨県立女子短大幼児教育学科

- ・昭和41年学科設立時より、私立幼稚園側から強い反対があったため、付属幼稚園の設置は実現しなかった。その後、文部省から再三設置を促されたが、実現していない。
- ・付属幼稚園がないので、実習依頼等実習関係の事務はすべて県総務部私学文書課で行っている。
- ・県外出身者もすべて県内幼稚園で実施している。
- ・1年次に通年で大学の外へ出て、「乳幼児の観察研究(実習指導を含む)」(2単位、必修)。5月保育所、6月福祉施設、6月下旬からは幼稚園で5～6人のグループに分かれて主として観察実習。
- ・2年次に市内の実習園(その年度の実習園、ほぼ8幼稚園)に出掛けて、本実習としての「教育実習」(ほぼ1カ月間)。
- ・平成2年より保育士養成課程を設置したが、付属保育園はない。そのため、保育実習は県内の保育所に出掛けての実習(2週間、2単位)。これに加えて、資格取得希望者は、児童福祉施設での施設実習(7泊8日、夏季休業中又は2

～3月の春季休業中)が必修。

ロ) 市立名寄短大生活科学科児童専攻

- ・昭和59年より幼稚園教諭養成課程を設置したが、付属幼稚園はない。平成2年より保育士養成課程を増設。

- ・教育実習は観察実習(1年, 1週間, 学外), 本実習(2年, 3週間, 学外)の2本立て。

- ・観察実習は市内の4園に教員が引率して行っている。付属の施設がないために、学生も教員も大変苦勞している。

- ・大学の授業と現場の実践を結び付けることが困難である。特に1年生の実習指導における大学の授業の一環としての指導が困難である。

- ・2年制課程での幼稚園教諭と保育士養成は、カリキュラムが過密になり、実習が多くて、授業のやり繰りが大変である。

- ・3年制化案は考えてはいるが、志願者減が心配されて踏み切れていない。

ハ) 倉敷市立短大

- ・昭和43年保育専門学校として創立、49年短大昇格。幼稚園教諭・保育士養成。

- ・保育士養成の保育専門学校としてスタートし、途中で幼稚園教諭養成課程が増設されたという経もあって、幼稚園免許は卒業要件になっていない。付属幼稚園がないため、9割前後の学生の実習は市立幼稚園56園に全面的に依頼している。

- ・実習依頼も配属も実務は一切市教育委員会が行っている。

- ・教育実習は2年次7月1週間, 11月3週間, 同一園で行っている。

ニ) 新見公立短大

- ・昭和55年, 広域組合立として設立, 創立時から幼稚園教諭・保育士を養成。

- ・元々保育士養成中心ということもあって付属幼稚園はない。管内(1市3町村)に公立幼稚園が20園あり, そこから全面的に協力を受けて

いる。実習依頼も各市町村教育委員会を通して行っているので, 大変スムーズに実習園を決定している。県外生が3分の1を占めているが, その場合は出身地で行うことが多い。実習方法は, 2年次10月に, 4週間連続で行う。

ホ) 埼玉県立短大

- ・保育士養成課程のみで, 付属保育園はない。

- ・30年前短大昇格時に付属保育園を設置したが, 近所に公立保育園が新設されたのを契機に, 県は廃園にした。そのため, 学生一人一人の力量や課題に見合った指導ができない。そのため, 力量不足や課題を抱えている学生に対してきめ細かな指導ができない。1年生の初めての実習時に, いきなり厳しい指導がなされて, 自信をなくしてしまう学生もいる。大学と付属の教員が連絡を取り合った継続的な指導ができず, 現場にお任せ的な実習にならざるを得ない。今日, 時代と保育現場が求めている質の高い力量のある保育士養成には付属保育園は欠かせない。

以上, 県外の公立短大の実習状況を調査してみた結果から指摘できることは, 第一に, 付属幼稚園(保育所)がないことによって教育実習をはじめとして幼児教育の教育・研究に様々な困難をもたらしているということである。

第二に, 市立短大の場合, 地域の公立幼稚園との結びつきが内容的にも行政的にも深いことで, それらが有形無形に実習のための便宜を図り, 実習を円滑にしていることである。

第三に, 県立短大の場合, 山梨県立女子短大では, 県が実習事務の大部分を代行していることで手続きがより円滑に進められている。また同短大は近いうちに4年制大学を新設の方針で, その際は付属施設の申請の検討中とのことである(大学設置基準第39条により附属学校設置義務)。

本学の場合においても, 仮に, 付属幼稚園がなくなれば, 県内には公立幼稚園がきわめて少ないため, さまざまな障害が少なくないことは明瞭で

ある。

(3) 長野県と他県では、環境や状況に違いがあるか

長野県は保育所入所児童数の比率が幼稚園児に比べて圧倒的に高く全国一位。逆に幼稚園就園率は全国最低である。これは、戦後昭和20年代から30年代の幼稚園、保育所急増期に、幼稚園よりも国庫補助が多い保育所設置策を当時の林虎雄長野県知事が選択した結果だと言われているが、実際のところは詳らかではない。

幼稚園は圧倒的に都市部の市と町に集中し、その他大多数の村や町には幼稚園は一つもない。ほとんどが保育所のみである。まさに長野県は「保育所王国」なのである。

III. 幼児教育の実践と理論の臨床的研究者集団としての存在意義

付属幼稚園の存在意義の第三として、日々の保育実践を通して、幼児教育についての理論と実践に関する臨床的、創造的、実験的研究を深くすすめる保育者集団としての役割が期待されている。

このテーマについては、立浪澄子長野県短期大学助教授と付属幼稚園の青木倫子・風間節子・長谷川孝子・坂口やちよ・降旗美佳子教諭との共同

研究の成果として『保育カリキュラムをつくる・はじめの一步——長野県短期大学付属幼稚園の実践——』（2000年11月、新読書社）が発刊され、今のところ、このテーマの研究を進めていくうえで、最も重要な研究の手掛かりを与えてくれる素材である。

私は、同書に、「保育カリキュラム研究へのいざない」と題する序文を書いて、幼稚園教諭養成課程の研究者と付属幼稚園教諭との臨床幼児教育学的な性格の共同研究の画期的なスタートを喜び、今後の共同研究のさらなる本格的な発展と深化に大きな期待を寄せた。

しかし、既に与えられた紙幅を超え、このテーマについては、残念ながら別の機会に譲らざるを得ない。

(付記)

本調査・研究の草稿執筆段階で、「はじめに——幼稚園教諭養成のあり方をめぐる全国的状況と課題」の部分は、本学幼児教育学科の立浪澄子助教授（保育内容論）に分担執筆をお願いした。また、長野県以外の公立短期大学における教育実習方法の調査は、同平林宏美助教授（体育学）に全面的な協力をいただいた。ここに明記して、感謝する。